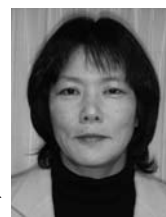


平成21年度全国結核対策推進会議に参加して

～結核対策における“連携”の意味～

日 時：平成22年3月5日(金)9:30～15:30
場 所：東京・新橋 ヤクルトホール

武蔵野大学看護学部
准教授 工藤 恵子



<はじめに>

3月5日、暖かい春の陽気の中、ヤクルトホール(東京都港区)において平成21年度全国結核対策推進会議が開催されました。今年度のテーマは、「結核医療と地域連携の未来像」でした。全国から、日ごろ結核対策に取り組んでいる300人を超える仲間が集いました。

<結核対策の現状と課題>

午前の部では、初めに厚生労働省結核感染症課の水野智美先生から、「感染症法における結核対策：現状と動向」について、次に結核研究所副所長の加藤誠也先生から、「今後の結核対策」について、それぞれ講演がありました。

水野先生からは、感染症法における結核対策の概要、医療基準の改正、入院医療の供給体制についての説明がありました。結核罹患率は減少しているが結核対策上の問題として、①罹患率の地域差、②都市部の問題(若年層、ホームレス、外国人の結核)、③高齢者の診断の遅れ、④働き盛りの受診の遅れ、⑤集団感染、⑥結核を診療できる医師の不足による診断の遅れ、⑦薬剤耐性結核、⑧HIVとの重複感染、以上の8点があげられました。

さらに加藤先生から医療供給体制の課題として、結核病床の利用率減少による病棟の閉鎖や著しい不採算性、看護師の不足などにより病床確保が困難な状況があることが指摘されました。今後は合併症対応も視野に入れ、地域実情に合わせた医療供給体制の再編を行っていくことと同時に、結核医療の技術的適正性の確保も必要であることが提示されました。

<DOTSと地域連携>

午後の部は「DOTSが結ぶ地域連携」というタイトル

で、東京都立多摩総合医療センターの藤田明先生、結核研究所対策支援部の小林典子先生、お二人の座長によるシンポジウムでした。シンポジストとして、まず広島県東部保健所の藤田玲子先生が「地域連携パスの取り組み」、次に独立行政法人国立病院機構和歌山病院の駿田直俊先生が「和歌山県における結核地域連携の取り組み」、続いて千葉県安房健康福祉センターの久保秀一先生が「地域連携パスを用いた早期発見システム」について報告されました。それぞれ異なる状況でしたが、医療機関と保健所をはじめとする地域の関係機関が連携パスというツールを介してつながっていく手法は共通しており、興味深い事例ばかりでした。

休憩をはさんで報告された、社団法人中野区薬剤師会の花井祐一先生の「薬局DOTS—中野区薬剤師会の取り組み—」、新宿ホームレス支援機構の安江鈴子先生の「ホームレス結核患者への支援活動と当事者参加の試み」は、地域における連携をさらに拡大、強化するものであり、今後の各地での取り組みに広がるのが期待されます。フロアからも多数の発言があり、DOTSの成功のためには、DOTSを通じてさらに地域の連携が強化されていくことが重要であると確認されました。

<おわりに>

結核対策には多くの課題が山積しています。しかし共に課題に取り組む多くの仲間がおり、これからの活動は「連携」がキーワードであることを再認識しました。「ここに全国の関係者が集まることに意義がある」という結核研究所長の石川先生の開会の言葉にもあったように、有意義な会議となりました。